

修士論文(要旨)

2012年1月

言語マイノリティの子どもたちをめぐる摩擦と社会格差

— 神奈川県の日系人の事例研究から —

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3012

中沢英利子

目次

第1章	はじめに	
1.1	研究の経緯	1
1.2	研究の背景	5
1.3	研究の目的	11
第2章	先行研究の概観	12
2.1	日本の学校教育の中の日系人	12
2.2	日本の社会の中の日系人	16
第3章	調査概要	20
3.1	調査方法	20
3.2	調査協力者	21
3.3	調査内容	22
3.4	分析方法	24
3.5	考察方法	25
3.6	文字化の規則	26
第4章	調査の分析	27
4.1	事例研究(1) ルーカス (ブラジル) の場合	27
4.2	事例研究(2) アンジェラ (ブラジル) の場合	39
4.3	事例研究(3) ソニアとフリア (ドミニカ) の場合	51
4.4	事例研究(4) ミカ (ブラジル) の場合	63
4.5	事例研究(5) キョウコ (ペルー) の場合	71
第5章	総合的考察	80
5.1	比較考察	80
5.2	定性的コーディングからの考察	84
5.2.1	日本語の学習	84
5.2.2	学校文化への適応	85
5.2.3	人間関係	85
5.2.4	母語学習	86
5.2.5	アイデンティティ	87
5.2.6	将来の展望	88
5.2.7	社会参加	89
第6章	おわりに	92
6.1	研究のまとめ	92
6.2	今後の課題	93

謝辞

参考文献

資料

本研究は、日本への越境を経験し、日本で学齢期を過ごした中南米出身の日系人へのインタビュー調査の結果を 5 つの事例研究としてまとめたものである。越境により新たに日本語という言語習得を課された子どもたちの学校生活と、その後の就労という選択への過程の考察を行った。学齢期での言語マイノリティの経験と就労者としての社会参加に境界線を設けず、連続してその環境と意識の変容の分析・考察を試みるものである。

稿者には、中南米諸国での日系社会との接触の経験があり、就労者として来日した日系人との日本での日常的な接触の経験が長い。その経験を通し、日本に定住する日系人の日本社会への対応とその意識の変容を核に研究を行いたいと考えたのが本研究の出発点である。家族単位での就労者としての日本への越境により、その影響を大きく受ける子どもたちの学齢期を終えた後の社会参加への連続的な過程を考察することにより、新たな社会構成員受け入れの方向性を再確認したいと考える。

本研究は、(1)学齢期に教育システムの中から脱落していく日系人の言語マイノリティの子どもたちは、脱落の過程と要因をどのように認識しているのか、(2)上記のような子どもたちが、社会との接点でどのような情報を受け取って社会参加に至っているのか、さらに就労後をも調査することで、(3)学齢期での情報の質と量の差異が、社会参加後に格差としてどのように形成されているのかについても明らかにすることを目的とする。

現在の日系人の子どもたちには、少しずつではあるが多様な進路選択が提示されつつある。しかし、1990年代から2000年代にかけては、日本語習得の不十分さにより、進学に至らず学齢期を終えるやすぐに就労を始める子どもも多かった。その多くが非正規雇用の単純労働者として就労を始めている。彼らはどのような意識を持ってその選択を行い、現在もどのような意識を抱えて日本社会で生活しているのだろうか。本研究の調査は、稿者が日常的に接触の機会が多い神奈川県に住む日系人に調査を依頼した。

調査は2010年11月から開始したが、2011年3月の東日本大震災後の日本への定住意識の確認の必要もあり、約6ヶ月間にわたって半構造化インタビューを実施した。国籍別の調査協力者は、ブラジル人3人、ドミニカ人2人(姉妹)、ペルー人1人となっている。インタビューの調査分析にはライフストーリー(やまだ2000, 桜井2002)を援用し、佐藤(2008)の定性的コーディングを参考に考察を行った。本研究は調査協力者個人の事実への認識の一般化を最終的に意図するものではないが、5つの事例ごとに個別の帰納的解釈による考察を行った。その後、それぞれの事例の個別性を重視しながら、さらに社会的文脈も考慮して総合的考察を試みた。

調査の結果からは、日本語習得の困難さ、学校文化や学校での人間関係の摩擦の経験と葛藤が語られた。調査協力者にはそれが理由で学校教育から脱落したという認識があるが、帰国か定住かという家族単位の曖昧な生活設計に因るところも大きかった。また、進学への積極的な助言者の存在が見当たらないことも共通している。母語や多元的アイデンティティの保持は、保護者の希望として語られているが、子どもたち自身の言語的アイデンティティから多元的アイデンティティ保持への繋がりには、語りの中からは確認できなかった。さらに、将来観の形成については、長期的で具体的な目標設定という思考の経験が語られる場面は少なかった。自分の意志ではない越境の経験が、諸事において諦観的で受動的な姿勢として現われており、就労に至る過程にも一貫して諦観的である。日本社会での学歴の重要性を認識する前に教育システムから離れ、多様で重要な社

会的情報からも遠ざけられた経験が語られている。その結果としての非正規雇用という就労の選択は、具体的な社会格差の問題として語りに表れるのではなく、未来永劫のマイノリティであるという自らへの属性付与に諦観的姿勢として表れる。職業格差等の現実に存在する格差以上に、日本社会で長期的な目標設定を行えない心理的負担の格差の方がより深刻に協力者の現在の生活に影響を与えていることが語りから考察できる。さらに年少者の保護者からは、社会格差是正の機能の可能性として、学歴という目標だけが具体的に語りに表れてくることも考察できた。

日本での定住を前提とするならば、日系人の子どもたちの多様な将来観形成のため、学歴獲得だけではない多様な支援の必要性があると考えられる。今もなお日本で第2言語学習者として日本語習得に励む日系人の子どもたちは多い。子どもたちの進路選択の可能性は広がりを見せてはいるものの、就労という社会参加が、学歴獲得に至らなかった結果としての選択であるという様相も呈している。将来的に多様な選択と多様な社会参加を促す支援のあり方が、今後追究されることを願う。

【参考文献】

- 太田晴雄(2005)「3章 日本のモノカルチュラリズムと学習困難」『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会 pp.57-75.
- 小内透(2009) 講座トランスナショナルな移動と定住第2巻『在日ブラジル人の教育と保育の変容』御茶の水書房.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人(2005)『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会.
- 吉川透(2006)『学歴と格差・不平等 成熟する日本型学歴社会』東京大学出版会.
- 児島明(2006)『ニューカマーの子どもと学校文化 ―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ―』勁草書房.
- 佐久間孝正(2006)『外国人の子どもの不就学 異文化に開かれた教育とは』勁草書房.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学 ―ライフストーリーの聞き方―』せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.
- 佐々木倫子(2003)「加算的バイリンガル教育に向けて―継承日本語教育を中心に」『創刊号 桜美林シナジー』 pp.22-38.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 志水宏吉・清水睦美(2001)『ニューカマーと教育 ―学校教育とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
- 関口知子(2003)『在日ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ』明石書店.
- 中島和子(2010)『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房.
- 拝野寿美子(2010)『ブラジル人学校の子どもたち―「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版.
- バトラー後藤裕子(2011)『学習言語とは何か 教科学習に必要な言語能力』三省堂.
- 前山隆(1982)『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会.
- 山田昌弘(2004)『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.
- 宮島喬(2011)「はじめに グローバル化のなかの人の移動と民族―教育を考える視点から」『国際移動と教育 東アジアと欧米諸国の国際移民をめぐる現状と課題』明石書店 pp.13-28.
- 山田迪生(1998)『船にみる日本人移民史 笠戸丸からクルーズ客船へ』中公新書.
- やまだようこ編著(2000)『人生を物語る―生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房.

【参考 URL】

法務省入国管理局(2011)

<<http://www.moj.go.jp/content/000073059.pdf>>(2011年12月21日検索)

文部科学省(2008)「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成19年度)」の結果について

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/08/08073011/001.htm>(2011年12月

21 日 検 索)